

(様式6-2)

## 研究成果概要

所属学校名 四日市市立中部中学校  
職・名前 教諭・佐藤 紀文

- 1 事業の名称 一般内地留学
- 2 留学先の名称 国立大学法人 大阪教育大学
- 3 研究主題 中部中学校版「外国人生徒教育の手引き」の作成
- 4 研究成果の概要

本研究は、四日市市の外国人生徒受け入れ拠点校である四日市市立中部中学校における外国人生徒教育の手引き作成と外部機関との連携に対する提案がテーマである。

中部中学校は平成15年度から外国人受け入れ拠点校に指定され、29年度には15年目を迎える。筆者は本中学校に2年間勤務し、外国人生徒教育に関するいくつかの課題を感じた。その課題解決の一つとして「外国人生徒教育の手引き」作成に取り組んだ。中部中学校は拠点校として、受け入れ時の適応指導から卒業までを一貫して指導しており、専任の日本語教師を置かず、全職員で外国人生徒の指導にあたっている。この二つの特徴を生かしつつ、中部中学校で勤務する全ての教職員が共通の課題意識を持ち、「いつでも」「だれでも」ワールド教室（中部中学校における適応指導及び日本語指導教室）で指導ができることを手引きの目標とした。また、手引きの中で外部機関との連携や教職員の研修についても触れた。中部中学校の中だけでなく、外部からの支援を受けることで、この教育課題の改善につながると考えたからである。

手引き作成には、各地の手引きを参考にしたほか、中部中学校の国際化対応教員や管理職に聞き取りを行うことで、「中部中学校に適した」内容を目指した。外国人生徒指導委員会の設置や日本語能力測定基準表の策定、小学校や専門機関との連携、研修の充実を新たな提案とした。外国人指導委員会は28年度中から試行され、29年度以降も継続・発展する予定である。また研修においても、多文化共生を内容にした道徳授業公開が29年2月に行われ、今後も様々な形でこの分野の研修が進められていく予定である。日本語能力を評価する方法は様々な地域や学校で開発・実施されており、それらを参考にしつつ、中部中学校に即した内容として、4領域×4段階×3項目という形で提案した。今後、外国人生徒指導委員会や研修委員会を通じて試行・改訂していく。

外部機関との連携を、最も困難かつ重要性を増す課題とした。中学校就学年齢の子どもたちは母語能力を一定レベルで有しており、母語での学習がアイデンティティの確立と日本語での学びの力を伸ばすという先行研究から、中部中学校でも母語の保持継承支援の体制づくりが必要であると考えた。NPOや大学などの外部機関との連携で、中部中学校で母語・母文化保持継承支援を実現できれば、外国人生徒のアイデンティティ確立と学力向上が期待できる。また、小学校との連携では、指導に関する書類の様式や研修会のテーマを共通にすることが考えられる。しかし、外部機関との連携は相手との折衝や予算など、一学校レベルでは解決できない課題が多く、28年度内では実現できておらず、29年度以降の重点課題といえる。

以上のように、学校での「外国人生徒教育」と行政、地域、専門機関を巻き込んだ「多文化共生」を同じ目標、同じ足場で構築し、「多文化共生の拠点校」を目指し、グローバルな視点と異文化間能力を持った人材育成につなげたい。